

< されど酒は微笑む >

今朝も 4:00 に出発した。昨日の好調さと今日の後半の 30km 峠越えのこととを思い、気を引き締める。国道 260 号線に出るまでの 1km は、鹿同伴の散歩とチャレ込んだ。ここの鹿は逃げないのである。4,5 匹後をぞろぞろついて来た。灯り一つない夜道を歩く人間が珍しいのだろうか、それとも私に同類の匂いを感じてのことだろうか。

新桑公民館の自販で熱いココアを調達し、朝食代わりとした。ロッジのご主人の話に依ると、紀伊長島までの 16～17km はコンビニがないそうだが、自販の飲み物でなんとかなるだろう。リュックに入っているのはのど飴だけ、何故かこの旅は持つ気になれない。

国道とはとても思えない一車線の道を、ぼちぼちと走りを入れながら進むと、山の中腹に紀勢南島トンネルの入り口の明かりが、ぼんやりと浮かんで見えた。標高 100m 以上はあるだろうか。「あそこまでどうやって行くんだろう」と思いつつ更に進むと、来た！勾配 20° オーバーの坂、車も 2nd ギアでなきゃ上れない様なくねくねの急坂が、500m ほど続く。走るなんてとてもじゃない、膝に手をつきながらヒーコラヒーコラと上った。1 ラウンド 10 秒で、強烈なボディブローを喰らった感じだ。昨日のサイクリストさん達が言っていたのは、この坂のことだったんだな。

トンネルは 1900m で、この旅で唯一走れる歩道が付いていた。先の坂で、重戦車のエンジンは全開になっており、楽々と抜けた。錦に下る 5km の坂も歩道がフラットだったから、歩くことなく下った。車が 5 分に 1 台の割合でしか通らない夜の明けない道を、ハンディライト一本で走るには、大変な集中力が必要である。足元を照らす光芒から、目をそらすことは禁物だ。

錦というところで迷い、ショートカットするはずの道を逆ショートカットしてしまって元来た道に戻ったが、早朝散歩の奥さんに尋ね 2km のロスに抑えた。不審に思ったら必ず人に尋ねること、恥ずかしがっている場合ではない。

錦から紀伊長島への 5km もしんどいものだった。向かい風が強く、路側の狭いブラインドコーナーが多い。おまけにお猿ちゃんが崖の上からお出迎え、石を投げられやせんかと気が気でなかったが、何食わぬ顔で通り過ぎた。猿と出くわしたら、目を合わせずに去るべし！みんな覚えとこうね。

やっとのことで二つの峠をクリアし、孫太郎トンネルの手前を左折する。長島港の方へ向い、長島の街を軽くカットだ。これで錦でのロスを取り返した。長島トンネルを抜けてコンビニをと思っていた矢先に、ポッカの自販があった。しめた、お汁粉が飲める。早朝のエネルギー補給には熱い汁粉が一番だが、ポッカの自販はザラには置かれていない。この旅を通じてこれっきりだった。

両手で缶を持ちフーフーと啜る。甘い小豆の味が何ともいえない。何を隠そう、私は左党でありながら、ぜんざいや汁粉が好物という甘党でもあるのだ。漬し餡が好きで、おはぎをビールのツマミにしてしまう。変な嗜好だ。

汁粉を飲み上げたところで、目の前にサークル K があった。伊勢以来 80km 振りのコンビニだ。ここで用を足しておこうと思い洗面所のドアを開けたら、トイレから若い OL 風の女性が出てきた。ハッとするほどの美人だった。もしこの人がアレをしていたら、と考えると入る気になれず、おにぎりとお茶を買って外に出た。次のコンビニまで我慢すればいい。俺は男だ、素敵な女性のイメージを壊すほど野暮ではない。

ここから国道 42 号線の 16~17km には、3km 置きほどに 300~400m くらいのトンネルがあり、人道トンネルが設けられていた。安全この上ないのだが、抜けると国道からかなりずれており、戻るのに一苦労した。

寂れた古里温泉という所を過ぎ、道瀬トンネルへの上り坂で、脳卒中でやられたのだろう、ステッキを突きながら懸命に歩行練習をしているお爺さんと出会った。挨拶をすると、「この坂は 500m あるんじゃ。いい坂じゃろう。3 往復するんじゃ。きついできれいなじゃ。ところで、あんた何処から来たんな。」「伊勢の方から走って来たんですけど、この坂は走れませんね。」「そうじゃろ、そうじゃろ、この坂はええで。」と一頻り坂自慢が続いた。別れ際に、「じゃ、おじさん、頑張ってリハビリして下さいね。」と言って去って行った。後ろを振り向くと、こっちをずっと見ている。後ろ髪を引かれる思いがした。それにしても、こちらの人は訛りが無い。やっと気がついた。

海山町相賀という所にサークル K があった。早速トイレに駆け込み、我慢していたものを排出した。トイレは洋式で広くて楽だった。腹がスッキリしたところでピーチゼリーを買って食べた。午前中の目標である尾鷲まであと 5km だ。

歩道が無く、路側帯まで無い 1km の尾鷲トンネルを抜けるのには勇気が要った。人道トンネルは塞がれているし、歩行者はどこを通れと言うのか。観光道路なので車の切れ目がない。仕方なしに、蟹の横這い状態でなんとか抜けた。

尾鷲への下りは最悪だった。路側に捨てられたゴミ、空き缶、空きビンの破片。こんなに汚い道を見たのは初めてだ。尾鷲市よ、恥を知れ。悪いのは捨てる方だが、市も片付けないじゃろ。昨日まではきれいだった靴が、すっかり汚靴になっちゃったじゃないか。誰の責任だ。

文句タラタラ、尾鷲の市街地にやって来た。中学校で、日本一雨量の多い所と習った覚えがある。大きな天文台が見えた。時刻は 10:20、ほぼ予定通りだが、三つの峠越えで消耗がひどい。ここでしっかり補給しとかんと熊野までもたないと思った時、ラーメン屋があった。何とタイムリーなことよ。開店前だったが、無理を言って開けてもらい、大盛りラーメンとライスを注文した。有難いことにトンコツだった。トンコツの北限は京都ではなかったかなあ、三重県にまで来ていたんだなあ、と妙に感激して平らげた。幸か不幸か、ビールは店に置いていなかったが。

腹ごしらえ完了で、妻と S.P ナガオカ氏に電話した。この旅で、ナガオカさんとは何度も連絡を取り合い、その都度長電話する。結果がとんでもないことになるとも知らずに。

さてと、ついにやって来ました、'08 ジャーニー最大の難所である矢の川峠越え、国道 42 号熊野街道だ。ここまで 43km、あと 30km の勝負に挑む。11:00 ジャストに上り始めた。2200m ある矢の川トンネルまでの 7km を徐々に上って行く。勾配はきつくないが、路側帯があったり無かったりする。熊野市へ往復する観光バスがすっ飛ばしてくるので、危なくてなかなか走れなかった。しかし、一番怖いのは橋だった。路側 0 cm、車道でいっぱいいっぱいなのだ。右車線を行くのだが、大型対向車が来ると欄干にしがみついて避ける。下を向くと、50m 以上はあろうかと思える谷底が見えた。高所恐怖症の私には十分な深さだ。脚がすくんでどうしようもない。車が来ないのを見計らって、センターライン付近をダッシュすることしばしばだった。

この日の矢の川トンネルは内面工事中で、片側通行だった。信号待ちの車から、視線を浴びせられまくる。こんな山奥でこんな格好では、確かに異様だわな。

トンネルの手前で警備員の方に止められ、「トンネル内は歩道が狭くて危ないから、工事中の左車線を通りなさい。」と言われた。ジャーニーランをやっていると色んなことに出会う。これもその一つだが、まさか 2km 以上もあるトンネルの車線を、ずっと走れるとはね。快く、「有難うございます。」とお礼を言い、2200m を疾走した。気分が良かった。

トンネルの出口にいた警備員さんに、「わしゃあ、長年こん仕事をやるとるが、ここを走る人を見たんは、あんたが初めてじゃ。」と言われた。そうか、ここは走る所ではないんだ。でも、やっちまったね。素直にうれしいじゃありませんか。

次の大又トンネル(1900m)はトンネルゲリラ走でパスし、集落がポツリポツリと点在する山村地帯をゆっくり下って行った。南紀地方は暖かいのだろう、全然紅葉していない。時間にはかなり余裕があるので、走ったり歩いたりして小坂という所へやって来た。午後 3:00、あと 10km だ。ここで最後のショートカットを狙うべく、旧道の小坂峠に踏み込んだ。すると、農作業中のお爺さんから、「にいちゃん、この道はいかんよ。道に迷って日が暮れたらどうするんじゃ。悪いことは言わんから国道を行きなさい。」とストップがかかった。地元の人言うことは必ず聞くべし。「はい、そうします。有難うございました。」とお礼を言い、国道 42 号線に戻った。

さんざん研究したのに残念、と未練を残しつつ下りにかかる。ここの坂は、ほんとにヤバかった。周期の短いヘアピンの連続、勾配もきつい。歩いていても惰性で走りになってしまう程だった。熊野市に近いためか、交通量が多い。上りも下りもカッ飛ばして来る。すきを見ては右から左、左から右へと走路を変える。これが結構応えた。

ほうほうの体で、大泊という所まで下りて来た。九州には、こんな坂はないわい。右のハムを痛めたのだろうか、違和感がある。体はへろへろだけれども、懸念の難コースをやっと終えることができる安堵感の方が強い。あと 3km だ。

17:00 キツカリに、「みはらし亭」というビジネスホテルに到着した。即、大浴場で汗を流し、ビール片手に洗濯。30 分以上はかかるので、風呂の脱衣場で入念なストレッチを繰り返した。やはり、右ハムは良くない。明日が心配だが、気にしない～、気にしない～、明日は明日の風が吹くで、今夜は熊野の味をたっぷり楽しもう。

てな訳で行ったのは、近くのビジネスホテル「河上」の一階にある居酒屋と寿司屋だ。ど

ちらにしようかと迷ったが、のんべえの私は「花かんざし」という居酒屋に入った。そしてこの選択が、明日の運命を決定付けることになる。

昼間苦しんだ分、夜の当りはデカかった。「花かんざし」は居酒屋割烹で、料理が極上だが、値段はほどほどだった。こんなものを食ったら、疲れなどぶっ飛ぶ。まず、突き出しで生ビール大を流し込み、那智勝浦のびんちょう鮪と太地町のびんちょう鯨を注文した。こいつ等にはやはり日本酒だろう。出た！「太平洋」だ。高知市酔鯨酒造ではなくて、新宮市尾崎酒造の太平洋である。スッキリしていてキリリと締まる。熱爛にしてもらった。メインは秋刀魚鮓にする。この辺りの名物で、酢で締めた秋刀魚で酢飯を押し包んである。形がそのままなので、恐る恐る口に入れてみると、これが何と言えはいいのか、「俺りゃあ、熊野に来て良かった」、大分の鯖鮓よりうまいかも知れない。メは、板さんお勧めの古道ラーメンにした。この店特産で、雉出汁スープに、明日葉という芹の一種を練り込んだ緑の麺がよく合う。さっぱりとした味わいで、スープ一滴残さずに舐めあげた。

さてそろそろ退散するかと、最後の酒をやりながら、板さんに熊野に来た経緯を喋っていると、隣の人が「その話、取材させていただきませんか。」と言って名刺をくれた。南紀州新聞、更田敏明と書いていた。那智勝浦支局にお勤めで、たまたま熊野に帰ってきて、馴染みのこの店に立ち寄ったそうだ。もちろん取材を快諾し、翌日の午前10時過ぎに勝浦支局を訪問という約束をして、店を後にした。

何という間であろうか。もしあの時、道に迷い込まなかったら、ラーメンを食べていなかったら、コンビニのトイレで大糞を垂れていなかったら等々、この出会いはなかっただろう。人生には、良し悪しきにつけ様々な間があるが、人との出会いほど微妙なものはあるまい。「縁は異なるもの」とは、よく言ったものだ。

それにつけても、私の場合は酒だ。私が下戸だったら、寿司屋の方に行って更田さんには会えなかったはずだ。私の人生にとって、酒は絶対的な存在である。酒で失敗したことは山ほどあるが、酒がなければトライアスロンもやっていないし、ウルトラマラソンもやっていないし、大分UMCの方々との出会いも無かっただろう。

今日だってそうだ。散々打ちのめされた一日だったが、最後は酒が微笑みを与えてくれた。ジャーニーランの目的を、「食と人との出会い」にしていたが、「酒と食と人との出会い」に改めることにする。

「酒無くて、何のおまえが重戦車」、どこかで聞いたような句だが、今日の私に相応しい科白だろう。酒とは、死ぬまで上手くつき合っていきたいものだ。